

## 寺尾寿芳「隠れ身（かむい）とアニミズム——創造の行方」概要

（西田哲学会、2015年7月26日、京都工芸繊維大学）

発表者は拙いながら長らく宗教間対話の研究に従事してきた。分厚い成果が蓄積されたこの分野ではあるが、対話が単純な対立であってはならないのはもちろんであるものの、相互承認に終わってもならない。むしろ対話は対話を超えてこそ対話になるといえる。ここでは対話を脱底し、感応道交の深層へと至る道程が描写されねばならない。発表者はその具体相をアニミズムに見て取る。しかもこのアニミズムが、キリスト教から最も遠いものとして否定されるべくして否定される規定概念としての宗教学的「アニミズム」を超えるとき、創造への賛美を泥臭く描き出すものとする。

手掛かりとして、現代日本の山里で独自の滞在型生活共同体を創立運営したドミニコ会司祭、押田成人をまず取り上げる。押田には草叢に横臥する姿を撮影した奇妙な写真が残されている。その謎めいた姿からは自然に同化する魅惑的の平安とともに、思想的緊張を孕む戦慄性をも感じ取ることができる。今回は比較的前者に重点を置いて発表したい。

押田には独自の思索として、「コトことば」という始原の言葉観があり、それはヨハネ福音書冒頭の独一无二なる翻訳（「無生に、かかわりの御言が在す、その御者は、隠れ身（かむい）さまに向って在り、そして隠れ身さまである」）にも読み取れるが、このことばは「穴」から沸き起こるものとされる。では、「穴」とは何か。アニミズム的な環境で、立位でも坐位でもない否定態の極致ともいえる横臥態をとる押田を、その「穴」に身体を投与し、聖霊における創造の証言する者、つまり「顕現しないもの」の顕現に立ち会う聖愚者として描いてみたい。

この押田の営みに最も響きあうかたちで思索したのは、文化人類学者の岩田慶治だと思われる。参与観察を旨とする領域の研究者らしく、岩田は現地の森羅万象に目を凝らし、耳を澄ますが、それは「あくまでも森のなか、山水のなかに立ち入って、自分を含むこの世界を新たに創造する営みだった。また、「それにはわれわれのからだに数多くの、無数の穴をあけなくてはいけない」のであり、それによって「言葉を積みあげる作業から手を引きたい」と願ってきた岩田は独自の道元解釈を伴いつつ、押田のいう「コトことば」へ直接しようとする。こうして岩田は文化に把捉され概念化した神を離れ、言葉と「もの」が非因果的に、つまり同時的に誕生するカミへと寄り添うことで、アニミズムを宗教学的既定性から救い出そうとするのである。

この押田と岩田をあらためてキリスト教的創造論の視点から捉え直す際、安息日に着目したい。「はじめにことばありき」のはじめには創世記冒頭の神の創造譚が重なる。そこでは六日間におよぶ創造のわざを離れた第七日の安息日が、創造を成就させる創造されざる要として組み込まれている。そして神はやすらぎにおいて、つまり行為からではなく存在そのものから自己を啓示する。その現場に立ち会う際に人は横臥し、また遊戯するのであろう。そこにこそ、押田と同じドミニコ会司祭の宮本久雄が石牟礼道子の著作に読み取った、「アニマのくに」が顕現するのである。